

Section 3

印象派の世界を 体感する

—近代都市パリの日常風景

19世紀も最後の四半世紀を迎えようとするパリ。フランスは前世紀末の革命勃発以来、近代化を推し進める中で急速な変化を遂げました。この頃、フランスの新しい時代に相応しい絵画を志した一群の画家たちは、絵画は実際に現場で仕上げられるべきだと考え、そのために新しい技法の開発を試みました。色の混合を避け、純粋色を中心とした小さな点として置き、捕色関係にある色彩を並置し、それが見る者の網膜の上で混ざり合い、視覚的に明るさや鮮やかさが保たれる方法が生み出されました。

ただ、主題は自然だけではありませんでした。同じ観念、方法によって彼らは同時代の生活、環境、風俗を見つめ、個人の住居にはじまり、鉄道、駅舎、橋、酒場、劇場などを描写しました。急速に変貌し近代化を遂げるパリは、自然と同等に彼らが画布に描き出す主題として好ましいものでした。このセクションでは、近代都市パリの情景を描いたベルト・モリゾ《バルコニーの女と子ども》(1872年)とギュスターヴ・カイユボットの《ピアノを弾く若い男》(1876年)を中心にとりあげ、その時代、社会的背景、そしてそれぞれの作品に秘められた新しい時代を生きる画家たちの思いとともにご紹介します。



ベルト・モリゾ《バルコニーの女と子ども》1872年 アーティゾン美術館

The Impressionists' Everyday Spaces — Let's Go See Paris, a Modern Metropolis

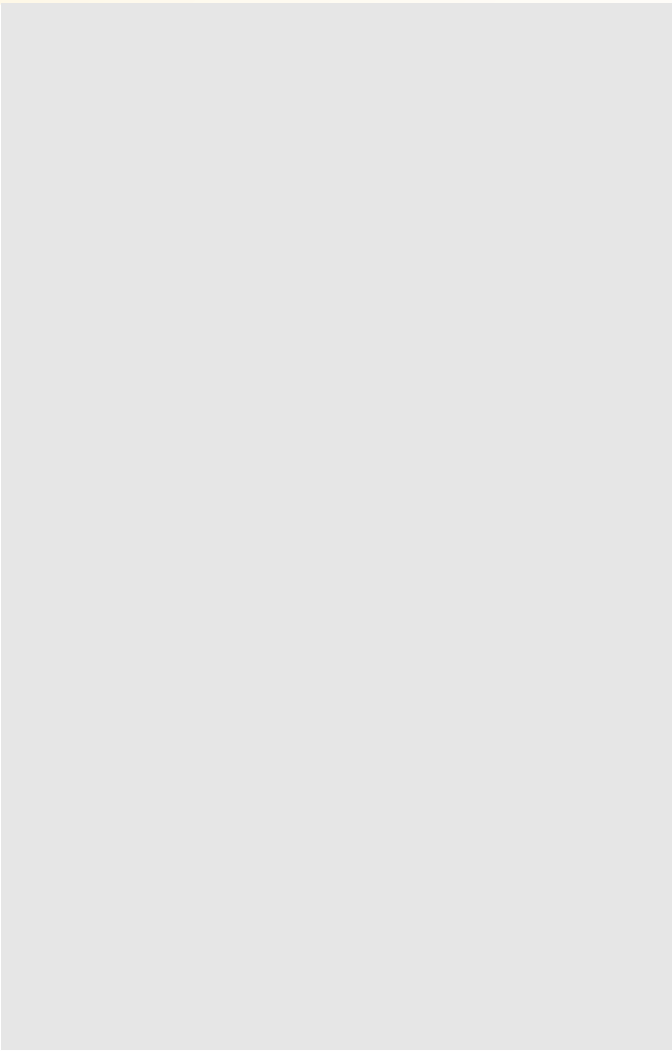
Paris, nearing the final quarter of the nineteenth century: France had, since the revolution near the end of the previous century, gone through rapid changes as it drove modernization forward. In that period, a group of painters who aspired to create paintings that suited France's new age engaged in developing new techniques; the result, through avoiding mixing colors, shifting to placing small dots of primary colors and lining up complementary colors, so that they mix on the viewer's retina, was the creation of a new method through which the colors maintain their visual brightness and vividness.

These artists painted landscapes in the outskirts of Paris, en plein air and also gazed intently on the lives of their contemporaries, the environment, and their manners and customs, making scenes in the streets of Paris their subject. Swiftly changing, modernizing Paris was, along with natural landscapes, a favorite subject for them to capture on their canvases. This section focuses on the Impressionists, painters who lived in that new age and filled their works with a sense of their age and their social context. The central focus is *Young Man Playing the Piano* (1876) by Gustave Caillebotte, who painted his younger brother, Martial, playing the piano in the Caillebotte residence on rue de Miromesnil, in Paris, and Berthe Morisot's *Woman and Child on the Balcony* (1872), depicting a mother and child gazing at the sights of Paris from the balcony of her residence on Rue Benjamin Franklin in Paris. We hope that you will experience the social and cultural landscapes they depicted.

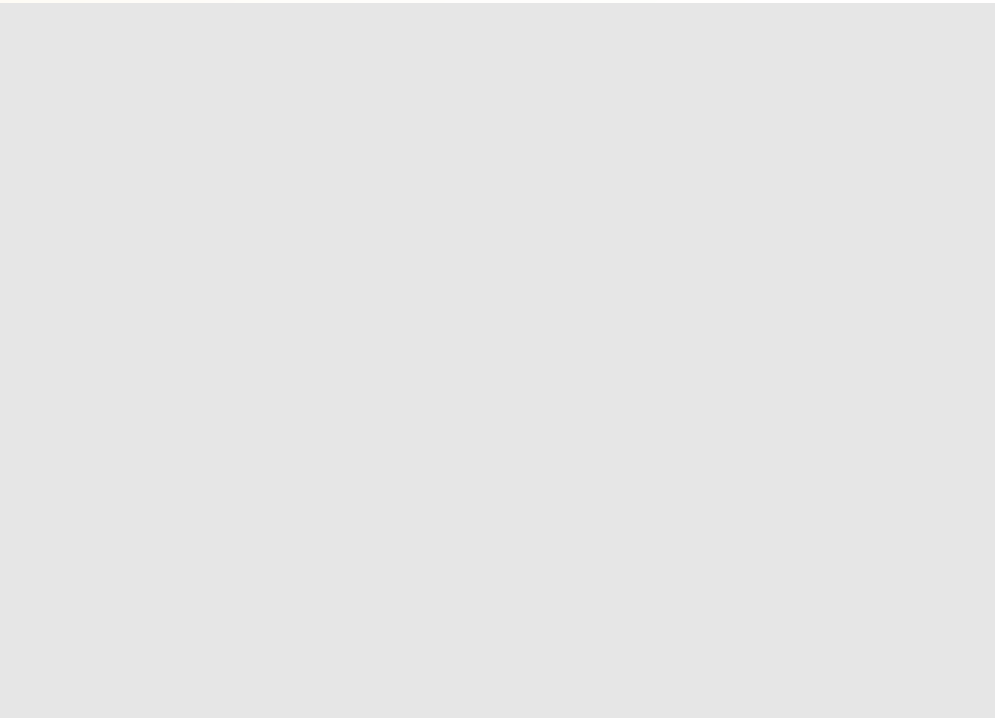
ARTIZON
MUSEUM

ベルト・モリゾ《バルコニーの女と子ども》

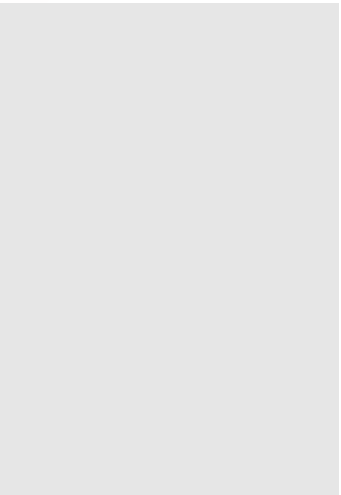
ベルト・モリゾ(1841-1895)は、印象派グループの数少ない女性の画家のひとりです。女性的な感受性で描かれる母子や子どもなどを主題とした作品は、繊細さと穏健さを生み出しています。《バルコニーの女と子ども》は、モリゾの画歴において最も評価されたもののひとつです。パリの西部シャイヨー宮殿にほど近いバンジャマン・フランクリン通りにあった自邸が舞台となっています。着飾った女性と子どもがバルコニーから眼下に広がるパリの景観を見渡しています。トロカデロ庭園、セーヌ川、シャン・ド・マルス公園が描かれ、地平線の右側にはアンヴァリッドの金色のドームが見えます。素早く、活気のある筆づかいながら、細部までがきめ細やかに描かれています。これら背景が比較的粗く描かれているのに対し、右上の花瓶に生けられた赤い花や女性の瀟洒な衣装、子どもの青いリボンと衣装はていねいに仕上げられています。女性のモデルは姉のエドマカイヴとされています。子どものモデルは、イヴの娘で、ピシエットと呼ばれたポール・ゴビヤールであるかもしれません。モリゾは、制作当時マネと非常に近い間柄にあり、この頃は双方の画家の間の影響関係が指摘されています。この作品にもモダンな主題を革新的な技法で描いているところにマネの影響が垣間見えます。描かれた風景は、第二帝政時にセーヌ県知事オ



ベルト・モリゾの肖像 Image: IanDagnall Computing / Alamy Stock Photo



エッフェル塔、トロカデロ広場 Photo: imageBROKER / Alamy Stock Photo



アンヴァリッド Photo: Masterpics / Alamy Stock Photo

スマンが主導したパリ改造の結果をよく表しており、マネやカイユボットと同様に、モリゾは新しい都市パリの風景を印象派の技法でとらえています。

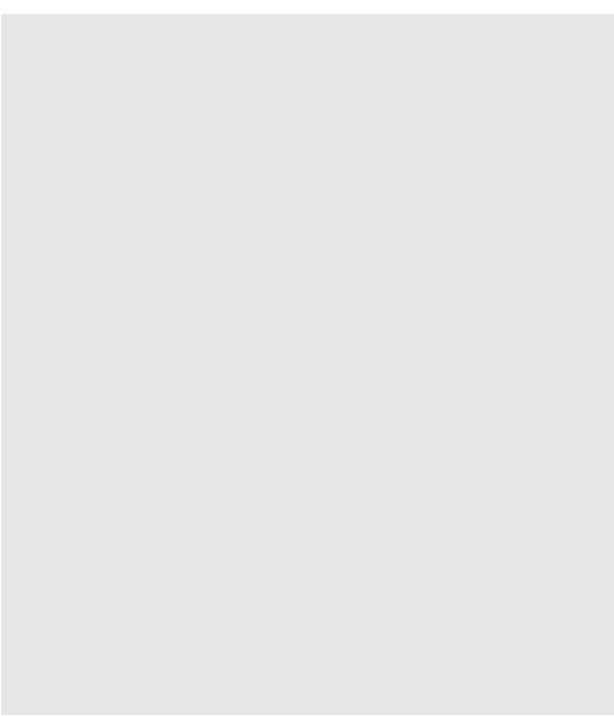
1. モリゾが描いた場所と描かれた風景

着飾った女性と少女が邸宅のバルコニーの眼下に広がるパリの景観を前にしています。女性の視線は、眼前に広がる風景の方を向いていますが、その視線は柵を持って目の前に広がる情景を見つめる娘を案じているようにも見えます。中景に描かれている風景は、トロカデロ庭園、セーヌ川、シャン・ド・マルス公園。遠景、地平線の右側にはアンヴァリッドの金色のドームが、女性の肩上看えるのはサント・クロチルド聖堂のふたつの尖塔、顔の右下に見えるふたつの矩形はノートルダム大聖堂でしょう。これはシャイヨー宮にほど近いパッシーのフランクリン通り(現バンジャマン・フランクリン通り)にあったモリゾの自邸で描かれたようです。

2. 描かれたのはだれ？

女性のモデルは、前述のとおりモリゾの次姉エドマ・ボンティヨン、あるいは長姉イヴ・ゴビヤールと推定されています。この時期に描かれたのは、シェルブールにいたエドマであるよりも、イヴのほうが可能性は高いでしょう。子どもはその娘ポール・ゴビヤール(通称ピシエット)ということになりましょうか。19世紀後半のパリの風俗を描いている一方で、後ろ姿ながら女性肖像画ともなっている作品です。モリゾの描く女性像は、ルノワールのそれとは一線を画した、新しい時代を生きるパリの気高い女性を象徴しているようです。

子どものポールはピナフォア・ドレスを着ており、母親は漆黒のウォーキング・ドレスにフォワード・ティルト・ハットを被って、手にはピンクの日傘を持っています。ディヴィッド・ヴァン・ザンテンは、『印象派ーファッションと近代』展図録(メトロポリタン美術館 2012年)の中で、少女はドレスの細部が見えやすいように背後から描かれ、母親がスカートの後部を膨らませるためのバスのルの形が見えやすいように側面から描かれている故に、画家は同時代のファッション・プレートを参照したのではないかと推察しています。確かに、この時代のファッション・プレートに画中のふたりを想起させるようなイメージを容易に見つけることが出来ます。



1872年頃のファッション・プレート Photo: Amoret Tanner / Alamy Stock Photo

3. エドゥアール・マネ

「私はイヴとピシエットを描いています。とても苦勞させられています。彼女たちは恐ろしく重くなっています。おまけにその構図はマネと似ています。私はこれに気づいて苛立っています。」

これは、ベルト・モリゾが姉のエドマ・ボンティヨンへ宛てた手紙(1871年8月)の一節です。モリゾが画家のアンリ・ファンタン＝ラトゥールを介してエドゥアール・マネ(1832-1883)を紹介されたのは1868年のことでした。互いに家が近く、同じ階級の出自であるマネ家とモリゾ家は親密なつきあいがあったといえます。モリゾは同年制作されたマネの《バルコニー》(1868-69年、オルセー美術館)のモデルとなっています。その後もマネは、モリゾをモデルとして知られているだけで11点の油彩作品を描いています。

印象派の女性画家として知られるエヴァ・ゴンザレスがマネの弟子として知られる一方で、モリゾは弟子ではありませんでしたが、とても近い関係にありました。モリゾはマネから多くを学びました。しかし次第に絵画様式の類似を盛んに指摘されるに至り、モリゾはその呪縛から逃れることを意識し始めます。手紙の一節は、モリゾがマネの模倣と揶揄されるのを嫌ってのことばでしょう。ただこれが

《バルコニーの女と子ども》について述べられたものかどうかの真偽は定かではありません。モリゾは、自己の絵画様式の明確な意識を持っていました。主題についてもまたわかり。描かれた風景は、第二帝政時にセーヌ県知事オスマンが主導したパリ改造の結果を表しており、モリゾは新しい都市パリの風景を印象派の技法で軽快に、しかし力強く捉えています。

4. 《バルコニーの女と子ども》の下に隠されたイメージ

2018年4月、絵画修復家の斎藤敦氏（故人）による作品収集時の状態調査により、画面の下に何か描かれていることが指摘されました。その後、東京藝術大学（当時）の西川竜二氏に調査を依頼し、東京藝術大学でX線調査を行った結果、下層に別の絵、おそらくは子どもを抱く母親の姿が描かれていたであろうことがわかりました。

5. マネの教え、あるいはその呪縛

モリゾがマネと最も親しく交流したのは1868年から74年であり、それは本作を描いた頃と丁度重なります。それはモリゾの画業の初期、画家としての独立した様式を築こうと奮闘していた時期にあたり、マネの存在あるいはその作品は、その後モリゾが画家として成長していく過程で非常に大きな支えとなったことでしょう。一方でこの時期のマネは、彼女のあらゆる繊細な筆致や、戸外制作とそれに起因する明るい彩色に影響を受けたとも言われています。

本作と同時期に、モリゾは同様な場所からパリ風景を描いた《トロカデロからのパリの眺望》（1871-73年、サンタ・バーバラ美術館）を描いています。人物は共通するモチーフでありながら、構図は異なります。しかし遠景に見える景色はより幅広くとられ、両者はほぼ一致します。

この絵に先行して、マネは《1867年の万国博覧会の眺め》（1867年、オスロ、ナショナル・ミュージアム）を描いています。シャン・ド・マルスが万国博覧会場となっているか否かの差はあれ、横長の空間にプランを重ねていく構図は、モリゾの絵と共通する遠近表現となっています。《バルコニーの女と子ども》は、それと同様な場所から描き、遠景に描かれた市街の建築のモチーフはところどころ一致するものの、構図は決定的に異なります。風景画の手前に大胆に人物を配



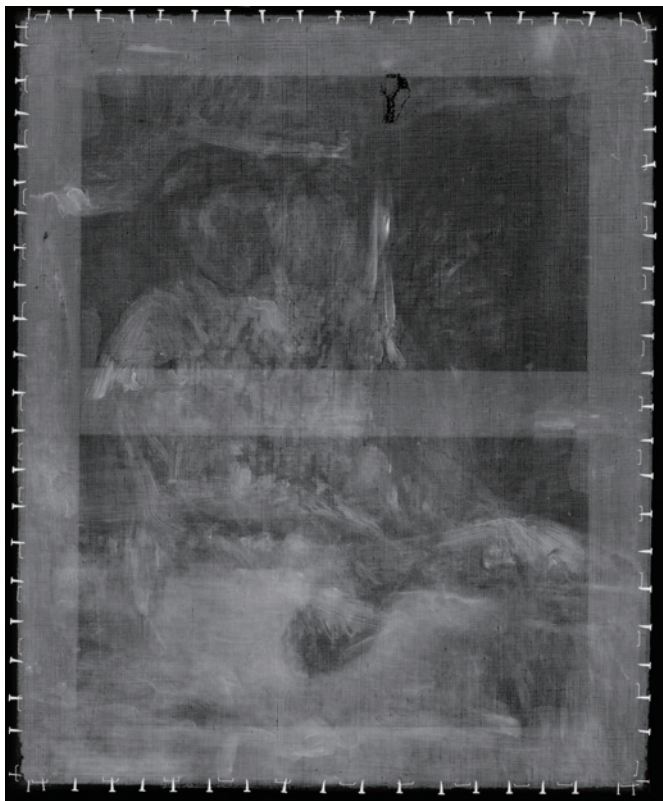
エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》
1873年 アーティゾン美術館



エドゥアール・マネ《メリー・ローラン》
1882年 アーティゾン美術館



エヴァ・ゴンザレス《眠り》1877-78年頃 アーティゾン美術館



《バルコニーの女性と子ども》のX線写真（撮影：東京藝術大学）

するイメージはとても大胆で、奥行きのある空間構成を実現しているのです。そして作品は、風景画であるとともに、人物画あるいは風俗画としての質を獲得しています。

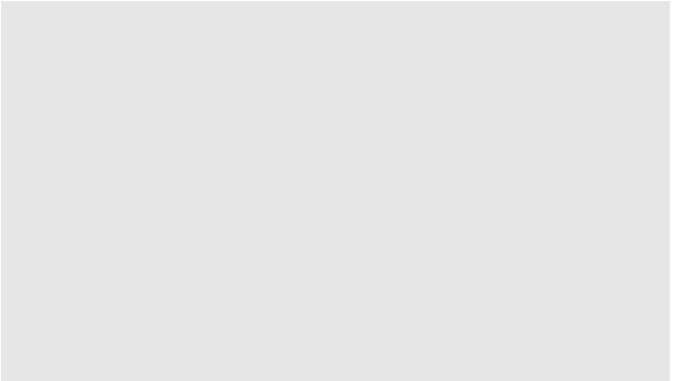
6. 19世紀末のパリの女性像

キャスリーン・アドラーは『ベルト・モリゾ』（1987年）において「《バルコニーにて》は油彩においても、水彩においても、描かれている場所は、市街地から遠く離れていることを想起させる。この絵に描かれている女性は、アンヴァリッドの方を必ずしも向いてはおらず、隣の子どものように見え、手すりはパッシーの世界とパリの街中の世界を効果的に分離している。すなわち、バルコニーの手前と向こう側で空間が分断され、人物がいる私的な領域と、近代都市が広がる公的な領域が描かれているのだ。…バルコニーの手すりは、これらふたつの空間の文字通りの障壁として機能している。」と記しています。

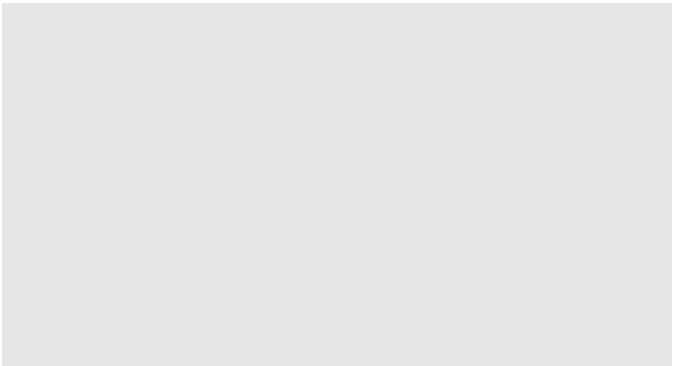
19世紀のパリの豊かな高級ブルジョア階級の女性に対し、社会的因習がゆえに男性には与えられていた自由の多くは禁じられていました。付き添いなしに近代都市の新しい空間を歩き回ることができず、女性にとって家の中が主たる領域であったのです。モリゾは主に自分の周りの世界を描かざるを得なかったのでしょうか。

確かに《バルコニーの女と子ども》が、男性社会に切り込むことの許されない女性画家としての忸怩たる思いを告白した、という説明には納得させられそうになりますし、すでに名だたる画家であったマネへの対抗心があらわれている、と言われると、その通りなのかもしれません。でもこれは画家としての真のスタートの時期にあたる作品です。大志を抱く女性が、この美しいイメージの中に、そのような鬱屈とした心情を吐露し、因習への不満をぶちまけている、という解釈に留まる絵なのでしょうか。

この作品には、モリゾがマネに出会う前に教えを請うたカミーユ・コロー（1796-1875）の瑞々しさが一方で感じられます。これから変貌していくパリの街を見渡す女のイメージは、その未来を予告する光輝いて見える少女とともに、その明るい将来を示唆しているのではないのでしょうか。彼女が革新的グループであった印象派の最初の展覧会に、華麗に登場する直前のことです。



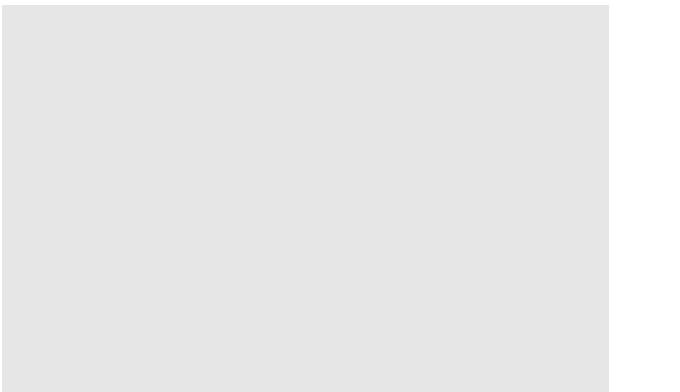
ベルト・モリゾ《トロカデロからのパリの眺望》1871-73年 サンタ・バーバラ美術館
© Santa Barbara Museum of Art, Gift of Mrs. Hugh N. Kirkland, 1974.21.2



エドゥアール・マネ《1867年の万国博覧会の眺め》1867年 オスロ、ナショナル・ミュージアム
Photo: CC B-NC The National Museum, Oslo



カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》1845年頃 アーティゾン美術館



ベルト・モリゾ《ノルマンディの農場》1859-60年頃 個人蔵
Photo: Art Heritage / Alamy Stock Photo



ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》1876年 アーティゾン美術館

ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》

カイユボット(1848-1894)は、印象派の画家。印象派展に自らも出品する一方で、その活動を経済的に支えたことで知られます。この作品は、パリのミロメニル通りの自邸でピアノを弾く、カイユボットの弟マルシャルを描いたものです。1876年の第2回印象派展に《床削り》(1875年、オルセー美術館)とともに出品された6点の作品のうち、最も批評で取り上げられた1点です。ルノワールが同じく室内の人物を描いた《すわるジョルジュ・シャルパンティエ嬢》と同年に描かれた作品でもあります。

19世紀後半のパリにおいて、ピアノは上流市民のステータスを示すものでした。絵画の主題になることも多かったのですが、この作品のように男性がモデルとなることは稀で、多くの場合、ルノワールに見られるように女性が描かれていました。この作品は、男性であるというのみならず、真摯に鍵盤に向かう人物を描いている点で、より近代都市の室内風景の自然な雰囲気を与えています。壁面の装飾、カーテン、絨毯、椅子などの調度品には植物文が施され、富裕な



ギュスターヴ・カイユボットと犬のヴェルジェール、カルーゼル広場、1892年2月

市民の瀟洒な室内が描かれています。また窓から入る光がピアノの鍵盤や脚に反射しています。さらに、ピアノの側面に鍵盤や指が反映し、ピアノの蓋には壁の柱が反映しています。奥行きを感じさせる空間に精緻な筆触で描かれた画面は、軽快な筆触を特色とする印象派の絵画の中では、かなり異質です。技法や主題は、同じ都市風景と市民たちを主題とした、ドガの室内画と似ています。これもまた、光と影の描写の探求を志す印象派の特徴のヴァリエーションであることを私たちに伝えます。

1. 描かれた場所

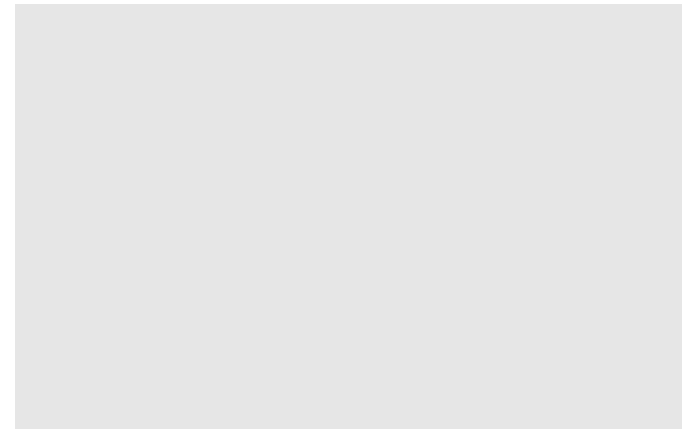
本作は、第2回印象派展に出品されました。描かれているのは、ギュスターヴの弟マルシャル・カイユボット(1853-1910)。彼が居るのは兄弟が住むミロメニル通りの邸宅の一室です。この邸宅は、彼らの父親がパリ大改造の折、1866年にパリ市から取得した土地に建てられ、同年の11月に竣工したものでした。

見るからに裕福な市民の邸宅の瀟洒な部屋は、同様に計算された構図の中に注意深い筆致により繊細に描き出され



この建築には、印象派の活動を助け、画家であったカイユボットが、ここに住み制作したことが刻まれたプレートがはめ込まれている。

ミロメニル通りの旧カイユボット邸
(撮影：新畑泰秀)



スクリブ通り9番地の自宅にいるマルシャル・カイユボット、1892-95年頃

ています。同時期に室内の人物を多く描いたエドガー・ドガの繊細ながらもあらあらしい筆触の作品と見比べると、カイユボットの筆触の特色がよく見えてきます。壁面、カーテン、絨毯のそれぞれには、華やかな植物文が施されており、レースのカーテンを通してパリの町並みがうかがえます。窓から注ぐ柔らかな光は室内をほんのりと照らし出しています。中央に鎮座するのは贅沢な調度グランド・ピアノ。その表面は、漆黒の鏡面となり、マルシャルの手、鍵盤、部屋の隅に垂直方向に走る2本の金の飾りを鈍く映し出しています。主人公たるマルシャルは薄暗いこの部屋で、外部から届く柔らかい光の巧みな表現によって引き立たされ、穏やかに、しかし真摯に鍵盤と楽譜に目を向けています。マルシャルは、自身作曲を手がけ、1887年には「エール・ド・バレエ」という曲の楽譜がアルトマンという出版者から上梓されています。この絵に彼が描かれたのは22歳の時。兄と同様に、自らの芸術的才能の赴くままに過ごすことができた弟は、その関心を音楽へと向けましたが、音楽を専業とせず、生涯のほとんどを兄と親密に暮らし、切手蒐集、園芸等々の趣味を分かち合い、それぞれの芸術的感性を認め合っていたといえます。

2. ピアノのある風景

カイユボットの時代、19世紀後半にも鍵盤楽器のある情景を描いた作品は多くあらわれます。たとえばルノワールは《ピアノを弾く若い男》と同じ、第2回印象派展に《ピアノを弾く女》(1875/76年、アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ)を出品しています。これらは、何れも西洋美術史における室内画の伝統を踏まえながらも、パリの近代化に伴う新しい時代の要素を加えているのです。

今もなお、最もポピュラーな鍵盤楽器であるピアノは、19



エラル社、グランドピアノ、平行弦・7オクターヴ 1877年 アーティゾン美術館



エドガー・ドガ《浴後》1900年頃 アーティゾン美術館



ピエール＝オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティ嬢》1876年 アーティゾン美術館

世紀のフランスにおいては、エラル社によるピアノがそれを代表していました。同社の創立者は、セバスティアン・エラル(1752-1831)。彼は1821年にダブル・エスケープメント・アクション、すなわちピアノの高速連打を可能にし、音楽表現の可能性を大きく広げる画期的な技術を生み出した人物として知られています。19世紀後半にエラル社のピアノの製造は興隆を極め、フランスでは「エラル」という言葉自体がピアノを指し示すことさえあったといえます。

カイユボットは、エラルのピアノを、それとして明示するために楽器の造形的な美しさとともに、鍵盤上部に記されたエンブレムまで描き写しています。今回の展示にはアー

ティゾン美術館が所蔵するエラル社製のピアノが出品されています。大きさもかたちもほぼ同じくらのこのピアノの名称は、詳しくは「エラル社グランド・ピアノ、平行弦7オクターヴ」。製造番号は「51399」、製作年が1877年であることからすると、作中のピアノとほぼ同年代のものであることがわかります。これと見比べるとカイユボットが克明に描いたピアノが、実物にいかに忠実であったかがわかります。画中所けるピアノの存在は、富裕な市民階層において、ピアノが身分を象徴する機能を持ったことにも関連しており、近代化を進める首都パリの新しい時代をささやかに表象している、と見なすことができるでしょう。

ピエール＝オーギュスト・ルノワール《ピアノを弾く女》1875/76年
アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ
Photo: Pierre-Auguste Renoir *Woman at the Piano* 1875-76
The Art Institute of Chicago



ギユスターヴ・カイユボット《イエールの平原》1878年 アーティゾン美術館

ギユスターヴ・カイユボット《イエールの平原》

この作品に描かれているのは、パリ郊外のイエールにあったカイユボットの夏の邸宅近くの風景。左から右になだらかな傾斜をもって、地平線はちょうど真ん中あたりを横切っています。前景には平原。薄茶を地に、淡い緑がかぶせられ、ハイライトには白が使われた繊細な表現です。その後方には灌木が一列に並び木陰をつくっています。左側には細長いポプラの木が4本。微妙に高さを変えながら、右から左に吹く風になびいています。イエールの町が後景に広がり、前景と後景の間にはイエール川が流れています。画面の半分を占める空は薄い雲で覆われています。その表現は、前景の平原と同じく繊細に表現されています。対照的な上下の表現が、^{どこか}長閑なパリの郊外の風景に永遠の広がりを与えています。カイユボットとしては珍しくパステルで描かれた作品で、1879年の第4回印象派展に出品されました。カイユボットがイエールで描いた作品の多くは、11ヘクタールにおよぶ広大な自邸の庭とその横を流れるイエール川を描いたものです。



イエールの旧カイユボット邸（現イエール市立カイユボット邸）入口（撮影：新畑泰秀 右頁とも）



イエールのカイユボット邸（左・下）

1. カイユボットとイエール

カイユボットは、他の印象派の画家たちと違って、自然風景も多く手がけています。しかし仲間たちが選んだ場所とは異なる場所が多く、初期の風景画の多くには「イエール」の名前が付されています。それらはカイユボット家が当時所有していた夏の邸宅のあった場所を意味します。イエールは、イル＝ド＝フランス地域圏エソンヌ県の街。パリの南東部郊外、パリの中心部からは19キロの位置にあります。街の中央部には、東から西に3キロにわたってイエール川が流れています。1846年には、パリ、マルセイユ間の鉄道路線が敷かれました。現在もイエール駅は存在し、パリ中心部からは、イル・ド・フランス地域圏急行鉄道網（通称 RER）のD線でシャトレ・レ・ザル駅より約25分で行くことができます。

カイユボットの父マルシャルがイエールに地所を購入したのは1860年のことでした。そこは1808年から1824年にかけてはモンダ公爵の領地でした。その後、パリのレストラン「オ・ロシェ・ド・カンカル」の料理長ピエール・フレデリック・ボレルが1824年にこの土地を入手して整備し、1830年頃までに英国庭園をつくりあげました。その後何人かの所有者を経て1860年にカイユボットの父親に売却されたのでした。父親がイエールの土地を求めたのは、パリ大改造によるパリの喧騒を逃れて夏期を過ごすことが目的であったよう



です。彼は土地を整備し、丘や小径をつくり、庭園内にいくつかの小さな建造物—スイスの山小屋、ローマン・ゴシック風の教会堂、円形の鶏小屋—をあらたに設置しました。

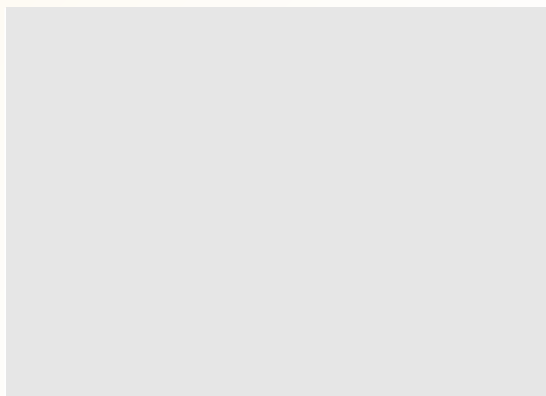
ギユスターヴ・カイユボットが家族とともに夏期をイエールで過ごすようになったのは、12歳の時でした。英国のピクチャレスク庭園の影響を受けて造園された11ヘクタールに及ぶ起伏豊かな地形に緑溢れる庭園は、さぞかし画家の創意を刺激したことでしょう。広大な庭園がある邸宅は、画家が普段暮らしているパリとは別世界でした。画業を本格的に

開始して間もない1878年から翌年にかけて、カイユボットはイエールの風景を数多く描きました。この土地はその後1973年にイエール市が入手し、1995年から15年の月日をかけて大がかりな改修を行い、現在は「カイユボット邸」の名で一般に公開されています。

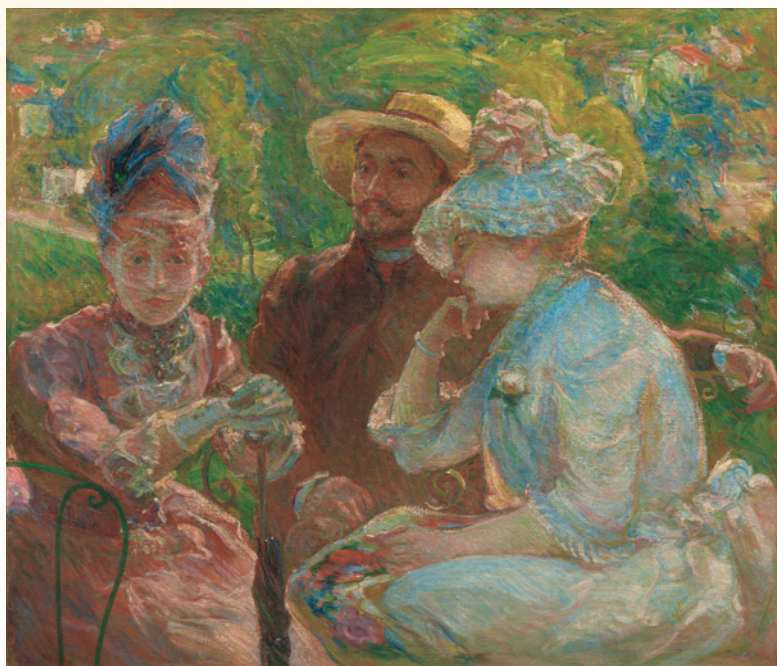
れを見るとマリーが戸外風景を描く時にここをお気に入りの場所として利用していたことがわかります。カミーユ・ピサロは1872年、いわゆる印象派の時代よりパリの北西部近郊のポントワーズに住居を構えその田園風景を多く描いています。

2. 印象派たちによる郊外の風景

印象派の画家はパリ市内とともに郊外の様子もよく描きました。印象派の女性画家マリー・ブラックモンもそのひとりです。夫フェリックスを通じて印象派の仲間入りを果たした彼女は、子どもを生んだ後、体調がすぐれなかったためパリの西部近郊セーヴルに移り住みました。フェリックス・ブラックモンは、セーヴルのテラスのふたりを描いていますが、こ



フェリックス・ブラックモン《セーヴルのヴィラ・ブランカのテラスにて（制作中のマリー・ブラックモン）》1876年 個人蔵



マリー・ブラックモン《セーヴルのテラスにて》1880年 アーティゾン美術館



カミーユ・ピサロ《菜園》1878年 アーティゾン美術館

※アーティゾン美術館所蔵作品とフェリックス・ブラックモンの作品以外は、すべて複製図版による資料展示です。

*Except for the collection of the Artizon Museum and the work by Félix Bracquemond, all exhibits are reproductions.

公益財団法人石橋財団
アーティゾン美術館

アートを楽しむ一見る、感じる、学ぶ
2023年2月25日（土）—5月14日（日）
主催：公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館
企画：教育普及部 新畑泰秀、細矢芳、江藤祐子
執筆：教育普及部長／学芸員 新畑泰秀

アートディレクション：田畑多嘉司、秋本真奈帆
デザイン：なかよし図工室
翻訳：ルーシー・S.マクレリー
印刷：日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
発行・著作：公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館
©2023 Artizon Museum, Ishibashi Foundation